

# イタリア語文構造の通時的変化

鈴木信吾

Shingo SUZUKI

## 1. Tobler-Mussafia の法則

古イタリア語（中世 13 世紀のテキストによるフィレンツェ方言）では、現代イタリア語とは違ったメカニズムによって接語（clitic）の配置が決まっていた。平叙文による主節に絞ってこれを考えると、例文(1), (2)に代表されるような2つの場合が区別される（以下、文を図式化して示す際、X は任意の語彙要素を、cl は接語を、V は定形に置かれた動詞を表す。また、全例文を通じ、問題とする定動詞は太字で示す）。

動詞の前の接語：X cl-V

(1) E così **ti dico** ch'è delle fedì... (Nov, p. 861 = Novella 73)

動詞の後ろの接語：V-cl

(2) a. **Domandoti** onde se' e di che condizione. (Nov, p. 807 = Novella 8)

b. ...e **trasse**lo di prigione e **donolli** molto nobilmente. (Nov, p. 801 = Novella 3)

c. E quando Nerone fo fatto imperadore, **ricordossi** delle battiture di Seneca... (Nov, p. 859 = Novella 71)

(1)のように、動詞が何らかの語彙要素（(1)では *così*）の後にあって、文頭に立たない場合は、接語（斜体で示した *ti*）はその動詞の前に置かれる。一方、(2)のように、動詞によって文が始まると見なせるような構造では、接語（いずれも斜体で表示）はその後ろに置かれる。(2a)は絶対文頭の場合、(2b)は軽い等位接続詞 *e*（または *ma*）に導かれた場合、(2c)は状況補語に相当する従属節に先行された場合、<sup>1)</sup>である。

中世ロマンス諸語の接語の配置の仕方をこのように一般化した法則は、Tobler-Mussafia の名で呼ばれるが、この法則の存在により、古イタリア語では、現代イタリア語ほど接語を動詞の前に置く頻度が高くなかったことがわかる。とりわけ、現代の平叙文による主節では、(2)に示したような接語の配置はもはや行われることはない。つまり、通時的なある段階で、接語配置のメカニズムに何らかの変化が起こったわけである。(3)は Bossong (1998) からの引用であるが、彼は、このような変化の理由として、動詞を文頭に置くという位置上の交替形が言語類型論的に見て少数派に属するものだからである、という点をあげている。加えて、文頭という位置は、しばしばテーマ<sup>2)</sup>の位置に符合するものであり、やがては主語の位置となる傾向がある、とも言っている。

(3) “La raison de l’abandon de l’alternative B) [représentée dans nos exemples (2) ci-dessus] est

indépendante de la clitisation; elle tient aux problèmes intrinsèques de la position initiale du verbe, variante positionnelle minoritaire dans une perspective typologique. La position initiale coïncide le plus souvent avec la position thématique; elle a tendance à se développer en position subjectale.” (Bossong, 1998, p. 23).

以下、Bossong のあげるユニヴァーサルな変化の方向性が、イタリア語の文構造の通時的変化にどう当てはまるのかを、主節の平叙文に絞ってではあるが、検討してゆきたい。

## 2. 古イタリア語の平叙文による主節の文構造

2.1. 中世ロマンス語の文構造を詳細に検討した結果、Salvi (2004) は次のような図式化によりその要約を試みている。

(4) 中世ロマンス語における文構造 (Salvi, 2004, p. 67 による)

Periferia | X<sub>Tema/Fuoco</sub> V<sub>flesso</sub> (S) ...

周辺部      文内部

(4)の意味するところは、文の「周辺部 (Periferia)」を除外すると、中世ロマンス語の文は、「定動詞 (V<sub>flesso</sub>)」の前に1つだけ任意の語彙要素 X を受け入れる位置が設けられるように仕組みられている、ということである。定動詞が2番目に来るこの基本的な構造は、V2の名で呼ばれる。動詞の前の位置を占める要素 X は、情報機能という面から見ると、「テーマ (Tema)」であっても「フォーカス (Fuoco)」<sup>3)</sup>であってもよい (ゆえに X<sub>Tema/Fuoco</sub>)。一方、統語面から見ると、X はいかなる文法上の役割を果たすものであってもよい。下の例(5)で X の位置にあるのは、(a)-(c)の順に、主語 (S) の *la madre*、直接目的語 (O) の *ciò*、副詞 (Avv) の *tanto* である。また、(6)に [ø] で示したとおり、X は空白のままでもよい。つまり、文は定動詞で始まってもよい (以下、例文(5)から(15)まで、定動詞の太字に対し、主語を斜体で示す)。

古イタリア語における文内部の構造: XV(S)

(5) a. SV: *La madre* **confessò** la veritade. (Nov, p. 801 = Novella 3)

b. OVS: *Ciò* **tenne il re** a grande meraviglia... (Nov, p. 800 = Novella 3)

c. AvvVS: *Tanto* **amò** *costei* Lancialotto... (Nov, p. 868 = Novella 82)

(6) [ø]VS: **Adomandò** *lo signore* mariscalchi [= maniscalchi]... (Nov, p. 800 = Novella 3)

主語が表現され、かつ、((5a)とは異なり) 定動詞の前の位置を占めないときは、(4)の図式のカッコ内にあるとおり、主語は定動詞のすぐ後ろに位置する。(5), (6)はいずれも主語の表現された例であるが、

主語が文頭に出てくる度合いが現代イタリア語ほど高くなかったのは、(5a)以外の例を見ればわかるとおりである。さらに、(1), (2)に見るように、古イタリア語は、現代イタリア語と同様に、必ずしも主語が表現されるとは限らない言語であった。<sup>4)</sup>

2.2. 古イタリア語における平叙文による主節を見てみると、傾向としては、動詞の前に1要素を出す(いわゆるV2の)文がその基本をなす、と言えることが確認できた。(5b), (5c)の例を見てわかるとおり、Xの位置に出るのが主語以外の要素で、かつ、主語が表現される場合は、主語は定動詞のすぐ後ろに残ることになる。また、(6)の例のように、Xが空白のまま、主語が定動詞のすぐ後ろに残ることもある。このような定動詞のすぐ後の主語は、テキスト中で息の長いテーマを引き継ぎ、高い予見可能性をもっていることを特徴とする(Suzuki, 2010, cap. V参照)。たとえば、(5b)の主語 *il* *w* と(6)の主語 *lo* *signore* は同一説話内の同一人物を指すが、この人物は、説話の冒頭で導入された後、続けざまに文のテーマとして受け継がれている。(5c)の主語 *costei* も、説話の女主人公が導入された後、その女主人公を指示する代名詞としてテーマに納まっている。

定動詞のすぐ後の主語がもつこうした語用論的性格は、動詞が複合形をなしているときに特にはっきりする(動詞の複合形は下線で示す)。

(7) Poi *fu* *Azzolino* *preso* in battaglia... (Nov, p. 871 = Novella 84)

(8) Al tempo di re Giovanni d'Acri *fue* *ordinata* [= istituita] *una campana*... (Nov, p. 839 = Novella 52)

斜体で示した主語は、いずれも定形に置かれた受動態の助動詞 *fu(e)* よりも後にある。しかし、息の長いテーマを引き継いでいるのは、定動詞 *fu* のすぐ後にありかつ非定形の過去分詞 *preso* よりも前にある(7)の主語 *Azzolino* (= *Ezzelino da Romano*) の方である。事実、これは、1説話内で重ねてのテーマづけの末に繰り返されたものである。一方、(8)の主語 *una campana* は、過去分詞 *ordinata* よりもさらに後ろに移っていて、ここで初めて導入されてテーマの一翼を担っている。このように、動詞が複合形をなす場合、動詞の定形ばかりでなく、非定形(の分詞や不定詞)よりもさらに後ろに移動した主語は、テーマではなくテーマに組み込まれる、と見なすことができる。

動詞が複合形をなしていない場合でも、主語が定動詞のすぐ後に来ず、何らかの要素の介在を許すようなら、(8)の場合と同様に、その主語は一般にテーマとはなり難い。次の(9)は、直接目的語の *salute* が介在した例である。

(9) A tutti i cavalieri della Tavola Ritonda *manda salute* *questa damigella di Scalot*... (Nov, p. 869 = Novella 82)

(9)は、「アストラットの乙女 (*questa damigella di Scalot*)」自身が残した手紙の書き出しの部分で、自

分の名を名乗る箇所であり、主語の *questa damigella di Scalot* をテーマに文が展開しているとは、どうも言い難い。この文の直接目的語 *salute* の位置と、たとえば、(5c)や(6)の直接目的語（それぞれ *Lancialotto* と *mariscalchi*）の位置とを比較されたい。(5c)や(6)の文の語順は (X)VSO であり、主語が定動詞とのあいだに直接目的語を介在させていないので、すでに見たとおり、それぞれの主語に、テキストの根底にある根強いテーマとしての性格が保証されている。<sup>5)</sup>

我々は、(5b), (5c), (6), (7)を例に、定動詞のすぐ後の主語（それぞれ *il re, costei, lo signore, Azzolino*）がテキスト中で息の長いテーマを引き継ぐものであることを見た。そこでの主語は、テーマとして引き継がれる際に、いずれも前方照応によって言語内の文脈に結ばれたものである。これに対し、定動詞のすぐ後に現れて同様の情報機能をもつ主語のうちには、発話の場面（という、いわば言語外の文脈）に結びついてその指示範囲を示すものがある。たとえば、1人称、2人称というダイクシスの人称代名詞 (Salvi & Vanelli, 2004, p. 323) や、一般的に「人は…」を表す (*l' uomo*) という総称の主語 (Salvi, 2010, vol. 1, pp. 161-164) がそれである。(10)が前者の、(11)が後者の例。

(10) a. *Quelle persone davanti cui io debbo parlare posso io fare docili...* (Lat, p. 192 = CIII, 1)

b. *Sovente e molto ò io pensato in me medesimo...* (Lat, p. 3 = I)

(11) a. *Ma in questo ch'è detto potete uomo bene intendere che...* (Lat, p. 152 = LXXVI, 25)

b. *...e cerca l'uomo la ruga [= strada] per li piue netti mangiari e più dilicati...* (Nov, p. 808 = Novella 9)

1, 2 人称の代名詞が指示するのは、いつも発話の場面にいる（か、そこからおのずと割り出せる）人物のことである。総称の (*l' uomo*) が指す人物の外延も、発話の場面から潜在的に抽出可能なものである。

これまで見てきた定動詞のすぐ後の主語の語用論的性格をまとめてみると、繰り返し述べてきたとおり、こうした主語は、テキスト全体に渡って常に文脈の下地に用意されている要素が現れてテーマとなったものである、と行うことができよう。

**2. 3.** 定動詞のすぐ後にあるこうした主語とは違って、古イタリア語の平叙文において、主節中の動詞の前にある要素は、それが ((1)の *così* に代表されるような) テキスト連結詞でない場合、主語であるかないかにかかわらず、テキスト全体の文脈の下地にある予見性の高いテーマから、予見不可能なフォーカスに至るまで、さまざまな情報機能上の価値をもち得る (Suzuki, 2010, pp.187-188)。ここでは、それがテーマである場合にみに問題を絞ってみると、古イタリア語の文内部では、(4)に示した図式の X と S の両方の位置にテーマが切り離される可能性があったことになる。これら 2 つに切り離されたテーマが実現した文では、定動詞の直後の S がもともとテキストの下地にあって根強いテーマであるのに対し、定動詞の前の X は一時的または単発的に切り替えられたテーマである傾向が強い。

以下、これを検証してみたい。

これまでにあげた例文のうち、(4)の X と S に当たる要素を両方とももち、しかも、X のテーマ性がはっきりしているのは、(5b)と(10a)、(11a)の 3 例である。これらの例を再度ここにあげておく。

(5) b. Ciò **tenne** *il re* a grande maraviglia... (Nov, p. 800 = Novella 3)

(10) a. Quelle persone davanti cui io debbo parlare **posso** *io fare* docili... (Lat, p. 192 = CIII, 1)

(11) a. Ma in questo ch'è detto **puote** *uomo bene intendere* che... (Lat, p. 152 = LXXVI, 25)

(5b)と(10a)の X は直接目的語（それぞれ *ciò* と *quelle persone davanti cui io debbo parlare*）、(11a)の X は限定の補語（*in questo ch'è detto*）である。このうち、(5b)と(11a)の X は、いずれも「このこと（*ciò*）」、「今述べたこの点で（*in questo ch'è detto*）」という前方照応的な意味をもち、テキスト内のさほど遠くない箇所ですべられた内容を指すという制約を受けることからして、単発で一過性のテーマであることが明らかである。一方、残った(10a)の X については、少し説明が必要であろう。(10a)は、Brunetto Latini (1220 ca - 1294 ca) の『修辞学 (La rettorica)』からの引用である。この作品は、Cicero の『発想論 (De inventione)』を注解し、古代の弁論術の教化を図ろうとするものであるが、その性質上、(10a)の X が表す「私が前で話さなければならない人々 (*quelle persone davanti cui io debbo parlare*)」という内容は、これと等価の *li uditori* (または *l'uditore*) という形で先行文脈に再三現れる。この形は、著者自身による Cicero の翻訳箇所にも、幾度となく現れる。

(12) [CICERONE] *Docili faremo li uditori se noi proporremo apertamente e brevemente la somma [= l'essenziale] della causa, cioè in che sia la contraversia. [...]*

SPONITORE [= COMMENTATORE] 1. *Quelle persone davanti cui io debbo parlare **posso** *io fare* docili... [= (10a)]* (Lat, p. 192 = CIII)

(12)の最初の部分は、Cicero が「我々は聴衆を感化することになろう (*docili faremo li uditori*)」と切り出す件であるが、これに Brunetto が注解を施そうとした冒頭の部分が、先にとりあげた(10a)である。したがって、(10a)の X に当たる直接目的語 *quelle persone davanti cui io debbo parlare* は、意味の上から言えば、確かに先行文脈の根底にある「聴衆 (*li uditori*)」を引き継いでいるものの、形の上では、ただ単に *li uditori* をそのまま踏襲したものではない。Brunetto は、これを表すのに、迂言法 (*perifrasi*) ということばのあやを使っており、それがゆえに、(10a)の X は重みを増し、テーマとしても情報量の豊かなものになっている。その結果、この X と、同じ(10a)文内部の S (斜体の *io*) とのあいだの予見可能性には、おのずと量的な違いが生じている。

以上、(4)の図式中の S と並んで X にもテーマ性が認められる場合、この 2 つの要素の予見可能性の度合いには差異がある、ということを見てきた。それは、定動詞の直後の S がテキストの根底にかか

わる息の長いテーマであるのに対し、Xは新たにすげ替えられた一時的なテーマである、という一般的な傾向に起因するものである。ところで、Givón(1989, pp. 224-225)によれば、テーマ要素は、その指示物の予見可能性が低ければ低いほどより左方に置かれるのが原則であるというが、よく考えてみると、古イタリア語の文構造自体にもそのようなユニヴァーサルな原則が仕込まれていることがわかる。継続性のない一時的なテーマXは、継続性のある息の長いテーマSに比べると、その指示物の予見がさほど容易ではない。その分、テーマづけがさしあたりの急務となるので、XはVの左方に置かれることになる。その一方で、予見可能性の高いSがVの右方に残るというのも、さほど不思議な話ではないであろう。

### 3. 文構造の通時的変化と Tobler-Mussafia の法則の失効の過程

ところで、主語が、一時的に切り替えられたテーマであるために、(4)の図式中のSの位置を占めずにXの位置に出てくる((5a)のような)場合には、古イタリア語でもテーマの位置は1つに絞られる。さらに、主語がもともとテキストの下地にあって根強いテーマである場合にさえ、(13)の斜体のioのように、それが文頭に置かれることがある。この場合も、文内部のテーマの位置が定動詞の前という1つの位置だけに絞られる。

(13) *Io voglio che tu mi dichi cui figliuolo io fui.* (Nov, p. 800 = Novella 3)

(3)に引いたBossongの言を待つまでもなく、今日のイタリア語では、文頭という位置とテーマである主語の位置とが完全に符合している。ところが、古イタリア語の平叙文による主節の文内部では、テーマの位置が(定動詞の前と後ろの)2つに切り離され得たことを見た。通時的に見て、ある程度の予見可能性をもった主語が、仮にそれがテキストの下地にある根強いテーマであったとしても、次第に定動詞の前に置かれるのが圧倒的になってくるのであれば、それは、そのような切り離しの現象が消滅したからだ、すなわち、定動詞の直後にテーマ性の高い主語が現れ得なくなったからだ、と考えられる。この切り離しの現象が消滅してゆくに当たっては、息が長く根強いテーマであるにもかかわらず、主語が定動詞の前の位置を占める((13)に見るような)構造が1つのモデルとしての役割を果たした、と捉えることは十分に可能であろう。

ただし、テーマである主語が動詞の前に出て、文頭の位置に符合するようになるには、長い期間が必要であった。事実、イタリア標準語がフィレンツェ方言から決別する直前、主語人称代名詞の表現が義務性に向かう頂点を迎えていた16世紀初頭においてもなお、我々は(4)の図式を思わせるような古い文構造の名残を見つけることができる。

(14) *A cotesto son io paratissimo [= prontissimo]...* (Mac. p. 74 = I, 1)

(14)は Machiavelli (1469-1527) の戯曲から引いたせりふの1部分であるが、ここでの主語 *io* はダイクシスの人称代名詞であり、したがって、テキストの下地に横たわるテーマである。しかも、このような主語が太字で示した定動詞のすぐ後に続いているという点で、(5b)や(10a), (11a)などで見た古い文構造 XVS を彷彿させるものがある。事実、(14)は、定動詞をはさんでテーマの位置が X と S の2つに切り離されている。その先行文脈を見てみよう。

(15) CALLIMACO Io non ti ho detto questo per voler tua consigli, ma per sfogarmi in parte, e perché tu prepari l'animo ad adiutarmi, dove el bisogno lo ricerchi [= esiga].

SIRO A cotesto son *io* paratissimo [= prontissimo]... [(14)] (Mac. p. 74 = I, 1)

「お前が私の手助けをする心積もりでいてくれるように (perché tu prepari l'animo ad adiutarmi)」そう言ったのだ、という主人 Callimaco のことばを受けて、召使いの Siro が言うのが(14)のせりふである。(14)の X に当たる *a cotesto* で「そのこと (cotesto)」の表す内容が、すぐ前の文脈からしか割り出せない「Callimaco の手助けをすること (adiutarmi)」であることを考えても、X のテーマとしての単発性、一過性がわかる。S が「私 (*io*)」という会話の根底に横たわるテーマなのとは対照的である。16世紀になっても、いまだに古イタリア語の文構造が消滅し切っていなかった証拠がここにある。

ところで、長い期間をかけて、テーマである主語の位置が文頭という位置に符合しようとしているあいだ、その一方では、これと並行するように、斜格の接語代名詞が動詞の前に置かれる頻度を増やしつつあった。ただし、接語が絶対文頭の位置を占められるようになるのは時期的に遅く、Antinucci & Marcantonio (1980, p. 29) によれば、少なくとも14世紀末までは動詞への後置が厳密に守られていたという。これが絶対文頭に出てくる例は、たとえば、15世紀半ばに書かれた Alessandra Macinghi Strozzi (1407-1471) の手紙文中に見られる ((16)に斜体で示した接語の *ne*)。それも、例外的にである (Wanner, 1981, pp. 168-169 参照)。

(16) *Ne darò libbre cinquanta alla Ginevra...* (Stroz, p. 90 = Lettera 7<sup>a</sup>)

しかし、主節が絶対文頭の位置から離れて、等位接続詞の *e* や *ma* に導かれたり、状況補語に相当する従属節に先立たれたりする場合を見てみると、(両者に量的なずれはあるものの)すでに14世紀には接語が文頭に立つ頻度を漸増していたことが確認できる (Antinucci & Marcantonio, 1980, pp. 29-31)。特に従属節の後では — 注1) に示したように — すでに13世紀から同様の例が散見できるほどである。したがって、接語が従属節のすぐ後に散見される段階から、最終的に絶対文頭に出る可能性をもつ段階にいたるまでの過程、言い換えれば、Tobler-Mussafia の法則が失効してゆく過程は、<sup>6)</sup> ちょうどテーマである主語が文頭を占める度合いを増してゆく過程に並行しており、双方があいまってゆっ

くりと推移を進めていたことがわかる。

#### 4. むすび

古イタリア語の平叙文による主節においても、文頭という位置が主語の位置に符合している例を見つけ出すのは、それほどむずかしいことではない。しかし、(5b)や(10a), (11a)のように、テーマの位置が定動詞をはさんで X と S に切り離された文では、主語の位置は定動詞の（前ではなく）後ろにあった。しかも、そのような主語は、文脈の下地にあって息の長いテーマであった。現代イタリア語では、テーマとして予見可能性の高い主語を定動詞のすぐ後ろに置くことはできない。だとすれば、このような主語が定動詞のすぐ後ろの位置に姿を表すことができなくなった時点をもってして、初めて(4)の図式で示した古イタリア語の文構造が今日に通じる新しい文構造に完全に置き換えられた、とすることができよう。実際、イタリア語の新しい文構造とは、Bossong (1998, p. 23) による(3)の方向性が示すとおり、テーマである主語が動詞の前の文頭の位置を占める構造のことなのだから。

我々は、また、平叙文による主節において、テーマである主語の位置が文頭という位置に符合してゆく過程と接語代名詞が動詞の前に置かれる頻度を増やしてゆく過程とが、時期的に重複し合っていることも見た。例外的であるとは言え、すでに 15 世紀には接語が絶対文頭に出る(16)のような文が現れ始め、テーマである主語の位置を文頭に重ね合わせる新たな条件が整いつつあったと考えられる一方で、16 世紀に入ってもなお、テーマとしての下地の整った主語を定動詞の後ろに残したままにしておく(14)のような古い文構造が残っていたのもまた事実である。このように、テーマである主語が文頭という位置に符合してゆく過程と、接語が動詞の前にしか置けなくなってゆく過程とは、互いにゆっくりと影響し合いながら進行している、というのが現実であろう。したがって、一方がもう一方に対する原因でもあり、それと同時に、また結果でもある、と見なすのがもっとも妥当な判断だと考えられよう (Palermo, 1997, pp. 159-160 も参照のこと)。

#### 注

- 1) ただし、すでに古イタリア語の時期から、従属節に先行された動詞であっても、(2c)の例とは裏腹に、その動詞の前に接語（下の(i)では斜体の *si*）を配置する例も散見される (Egerland & Cardinaletti, 2010, p. 434. なお、同ページには、ごく少数ながら、等位接続詞 *e* にかかわる(2b)の反例もあがっている)。

(i) *Quando voi togliete, si vuole sapere perché...* (Nov, p. 820 = Novella 24)

(i)のような場合には、従属節が状況補語を表す 1 つの構成要素 X としてとらえられており、本文中の例(1)と同じ Xc/V の図式に当てはまると考えられる。

- 2) ここで言う「テーマ」とは、話し手が文のなかで何について述べるのかを言う部分のことである。これに対し、「レ



ーマ」とは、テーマについて何を述べているのかを言う部分のことである。

- 3) ここで言う「フォーカス」とは、話し手が文のなかで話のピントを合わせようとする部分のことで、Lombardi Vallauri (1998) の言う *focus ristretto* (narrow focus) に相当する。ただし、動詞の前の要素 X がフォーカスである場合については、本文では取り扱わないので、たとえば、Benincà & Poletto (2010, pp. 60-62) などを参照のこと。なお、X がテーマである場合については、のちの 2. 3 節で触れる。
- 4) 本文では、(4)の「周辺部 (Periferia)」を問題にすることはないが、たとえば、すでに見た(2c)の *quando Nerone fo fatto imperadore* という状況補語節は、文の周辺部の要素と見なせる一例である。これが文頭の要素 X と見なされていないことは、続く再帰動詞の *ricordossi* における接語 *si* が動詞本体の後ろに置かれていることからわかる (これを注 1) の(i)の場合と比較のこと)。さらに、文中の要素が周辺部に左方転位した例を 2 つあげておく ((4)にならい、周辺部と文内部の境目を縦線により示す)。

(i) O | SV: ...e chi non ti ubbidirà | *tu lo pulirai*... (Nov, p. 806 = Novella 7)

(ii) S | [e]V: *Le genti ch'erano intorno a ser Frulli, | domandârlo com'era*. (Nov, p. 877 = Novella 96)

(i)は直接目的語が、(ii)は主語が左方転位した例である。(i)の文内部には、対格の接語 *lo* による直接目的語の繰り返しが見られるのに対し、(ii)には (主格の接語が存在しないので) そのような繰り返しがない。また、(i)では主語の *tu* が文内部の先頭の位置を占めているが、(ii)では X が空白のままである。そのため、(ii)では、(2c)の *ricordossi* と同様に、接語 *lo* が定動詞 *domandâr* [= *domandarono*] の後ろに置かれている。

- 5) 動詞が複合形でなく、かつ、VS のあいだに介在し得るような語彙要素を含まない文、つまり、単純形の動詞とそれにすぐ続く主語とからなる文は、実は、この主語の語用論的性格が一義的には決まらない。事実、そうした構造をもつ文の主語は、テーマであることもあれば、レーマであることもある (Benincà & Poletto, 2010, pp. 65-66 参照)。

(i) *Li ambasciadori fecero la dimanda loro, e videro li costumi e la corte. Poi, dopo pochi giorni, adomandaro commiato. [...]* **Andâr li ambasciadori**, e... (Nov, p. 798 = Novella 2)

(ii) *E lo 'mperadore rispuose e disse: – Io ti sodisfarò, quand'io tornerò. – Ed ella disse: – Se tu non torni? – Ed elli rispuose: – **Sodisfaratti lo mio successore**.* (Nov, p. 857 = Novella 69)

上の具体例においても、波線の下線部に斜体で示した主語は、(i)がテーマであるのに対し、(ii)はレーマである。まず、(i)の先行文脈では、「使節 (*li ambasciadori*)」がすでにテーマとして打ち立てられており、波線下線部の主語 *li ambasciadori* は、それを受け継いだものである。一方、(ii)の間答では、「陛下がご帰還にならなかつたら (*se tu non torni*)」約束はどうなるのか、を尋ねられた「皇帝 (*lo 'mperadore*)」は、波線下線部で「朕の後継者が願いをかなえてくれよう (*sodisfaratti lo mio successore*)」と答えている。斜体の主語 *lo mio successore* は、明らかにレーマであり、ここにピントの合ったフォーカスでもある。なお、上の(i), (ii)における斜体の主語はいずれも「定 (*definito*)」という特徴をもつが、これが下の(iii)のように「不定 (*indefinito*)」の場合には、問題にしているような文構造の主語は一般にレーマをなすものと考えられる (主語が「不定」に加えて「無生 (*inanimato*)」でもある、本文の例(8)も参照のこと)。

(iii) Fue uno filosofo molto savio, lo quale avea nome Diogene. (Nov, p. 856 = Novella 66)

- 6) ただし、Palermo (1997, p. 159, n. 21) の調査によれば、15 世紀から 16 世紀半ばにかけては、絶対文頭で接語が動詞の前に現れる頻度を徐々に増やしているのに対し、等位接続詞 e の後では接語が動詞の後ろに置かれたままのことが多い、という。本文においては、この等位接続詞 e にかかわる「逆行現象」を問題としないが、いずれにしろ、通時的に大きく見れば、現代イタリア語に向かって接語が動詞の前に現れる頻度を着実に伸ばしていつているのは、紛れもない事実である。

## 書誌

### ●使用テキスト

Lat: Brunetto Latini, *La retorica*, testo critico di F. Maggini, Firenze, Le Monnier, 1968.

Mac: Niccolò Machiavelli, *Mandragola*, in Id., *Teatro*, a cura di G. Davico Bonino, Torino, Einaudi, 1979, pp. 65-137.

Nov: *Il "Novellino"*, in *La prosa del Duecento*, a cura di C. Segre & M. Marti, Milano/Napoli, Ricciardi, 1959, pp. 797-881.

Stroz: Alessandra Macinghi Strozzi, *Tempo di affetti e di mercanti: lettere ai figli esuli*, Milano, Garzanti, 1987.

### ●参照文献

Antinucci, F & A. Marcantonio (1980): *I meccanismi del mutamento diacronico: il cambiamento d'ordine dei pronomi clitici in italiano*, in "Rivista di grammatica generativa", 5, pp. 3-50.

Benincà, P. & C. Poletto (2010): *L'ordine delle parole e la struttura della frase*, in GIA, vol. 1, pp. 27-75.

Bossong, G. (1998): *Vers une typologie des indices actanciels: les clitics romans dans une perspective comparative*, in P. Ramat & E. Roma (a cura di), *Sintassi storica*, Roma, Bulzoni, pp. 9-43 ("Pubblicazioni della Società di Linguistica Italiana", 39).

Egerland, V. & A. Cardinaletti (2010): *I pronomi personali e riflessivi*, in GIA, vol. 1, pp. 401-467.

GIA: Salvi, G. & L. Renzi (a cura di), *Grammatica dell'italiano antico*, 2 voll., Bologna, il Mulino, 2010.

Givón, T. (1989): *Mind, code and context: essays in pragmatics*, Hillsdale, N.J., Lawrence Erlbaum.

Lombardi Vallauri, E. (1998): *Focus esteso, ristretto e contrastivo*, in "Lingua e stile", 33, 2, pp. 197-216.

Palermo, M. (1997): *L'espressione del pronome personale soggetto nella storia dell'italiano*, Roma, Bulzoni.

Salvi, G. (2004): *La formazione della struttura di frase romanza: ordine delle parole e clitici dal latino alle lingue romanze antiche*, Tübingen, Max Niemeyer.

Salvi, G. (2010): *La realizzazione sintattica della struttura argomentale*, in GIA, vol. 1, pp. 123-189.

Salvi, G. & L. Vanelli (2004): *Nuova grammatica italiana*, Bologna, Il Mulino.

Suzuki, S. (2010): *Costituenti a sinistra in italiano e in romeno: analisi sincronica e diacronica in relazione ai clitici e agli altri costituenti maggiori*, Firenze, Accademia della Crusca.

Wanner, D. (1981): *On the language of the letters by Alessandra Macinghi Strozzi*, in "Papers in Romance", 3, 3, pp. 161-177.